

芦屋市制施行 70周年記念 《夏休み特集》

本市は、昭和十五年十一月十日、それまでの精道村から一躍、全国で七三番目の市として誕生しました。本年は、その市制施行から七〇周年を迎えます。

今回は、今から約七十年前の芦屋、またそのころの子どもたちの夏の過ごし方を、市制施行五〇周年記念写真集「芦屋今むかし」や市内にお住まいの高瀬湊さんの著書「遊べ、あそべ！ おじいさんの腕白時代」などから、ご紹介いたします。精道村から芦屋市へと移り変わるころの時代背景、当時の打出(芦屋)の夏の風景を思い浮かべながら、お楽しみください。

70年くらい前の芦屋・打出浜物語 子どもたちの夏休み

問い合わせ 広報課 ☎38-2006

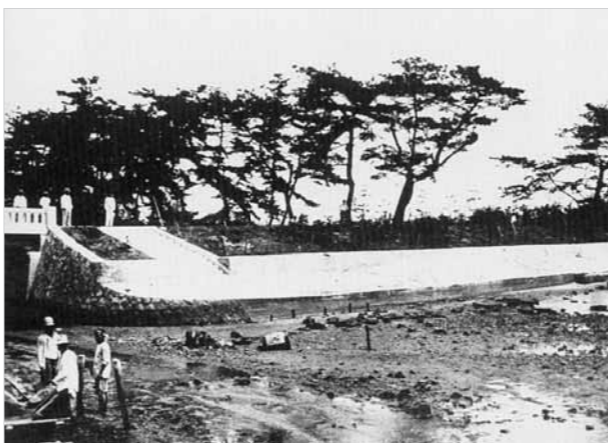
夏の一 番 漁

おじいさんが学んだ宮川小学校の運動部第二節に、打出あしやの浜ゆたか、という句があったのを今でも覚えていて、あの当時は景色といい、海の幸といい、まったくその通りだったよ。

あ、このころ、松林と白砂の続く海岸には、へばりつくようにして漁師さんたちの苦みが軒を連ねていたんだ。ここで獲れる魚といえば、イワシや小アジなどの小物だったが、漁獲量もそこそこあったらしく、だしやこ作りで生計も成り立っていた。ここでは特に夏季が収穫のシーズンだった。獲れたてのヒチビシした小魚は、漁師小屋の大釜でさつゆであと、海岸の砂浜や防潮堤の石だたみに敷きつめた粗むしるに並べられる、という一面にぶちまけられるんだ。いわゆる天日干し太陽の熱で乾燥させるんだ。

さて、おじいさんの印象に残る夏の打出浜は、まず沖合いへ網入れする小型蒸気船の、ポン、ポンという音から夜が明けるんだ。

日の出前、ようやく薄明かりが漂い始める四時過ぎには、先発の一番漁船が、朝もやをついて出発して行く。



昭和12年ごろ・防潮堤ができた当時の宮川河口「芦屋今むかし」より

精道村から芦屋市へ 時代背景

芦屋市が市制を施行した昭和十五年前後は、世界や日本にとってもまさに激動の時代そのものでした。

精道村の発展は、交通機関の発達にもなっており、住宅開発が進められ、明治、大正年間からすでに生活環境の整備も整い、文化住宅都市の基盤が形成されていきました。

また大正十二年、当時日本一といわれた鉄筋コンクリート三階建の村役場竣工。昭和四年、株式会社六龍荘が国有林の払い下げを受け、東洋一の健康地をキャッチフレーズに開発を始めた住宅地は、昭和六年に竣工しています。この六龍荘は、昭和十一年に国際ホテル(現・芦屋大学)も建設され、外国人や一流財界人が泊まるホテルとして有名でした。



市制施行祝賀の旗行列(昭和16年・市役所前)

この間、昭和九年の室戸台風や同十三年の阪神大水害で、精道村も甚大な被害を受けています。

市制施行 全国屈指の富豪村として発展してきた精道村は、昭和十五年十一月六日付け内務省告示第五八〇号により、精道村を廃しその区域をもって芦屋市を置くことが認可され、同月十日、時あたかも皇紀二六〇〇年記念祝典挙行の日を期して市制を施行し、ここに芦屋市の誕生を迎えました。芦屋市は、全国で七三番目です。

学校のようす 《昭和初期〜昭和二十年》

精道村時代、精道・宮川・山手・岩園の小学校のほか、中等教育機関として、昭和十一年十月六龍荘に、私立芦屋高等女子学校が設立されました。また、同十五年には村民の懇案であつた県立中学校現立芦屋高等学校の前身が設立され、精道村の中等教育はいっそう充実しました。

そのほか、新教育を目指した私立児童の村小学校が、大正十五年二月に芦屋へ移転開設し、昭和二年八月には三田谷治療院も開設、同十三年には院内に附属琴ヶ丘尋常小学校が設けられました。

昭和十六年四月には、小学校が国民学校と改称され、軍国主義教育の風はいつそう強くなり、防空訓練や勤労奉仕の行事も加わりました。また、同二十年からは空襲が激しくなり、学童疎開も行われました。



昭和13年7月5日・阪神大水害で泥水に埋まった国鉄線路「芦屋今むかし」より

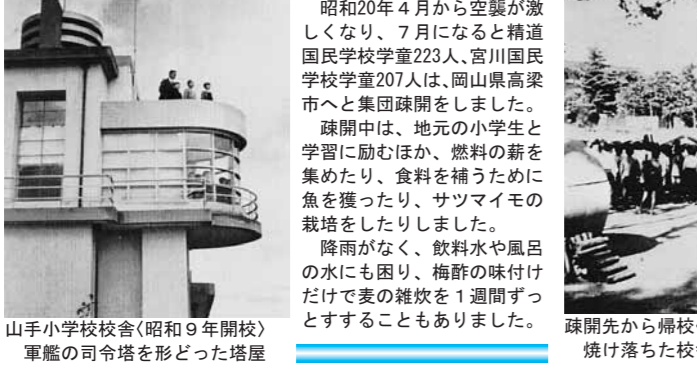
■阪神大水害 昭和9年の「室戸台風」による災害が人々の記憶から消え去らない13年に、阪神地方は空前の大水害に見舞われました。6月28日から降りだした雨が7月5日には最大の雨量(1日362mm)となり、山津波が押し寄せ、芦屋川・高座川・宮川などがはんらんして、精道村は泥の海と化しました。谷崎潤一郎の名作「細雪」には、その惨状が全編中の圧巻となって、写實的に描かれています。【精道村の被害状況】死者3人/重傷者2人/家屋流出14戸/全壊14戸/半壊111戸/橋梁流出6件/橋梁破損8件/道路堤防の破損決壊10件



大正8年に建てられた精道小学校校舎(明治19年開校)



昭和18年ごろの岩園小学校校舎(昭和9年開校)



山手小学校校舎(昭和9年開校) 艦艇の司令塔を形どった塔屋



昭和19年ごろ・戦時下の運動会(山手小学校) 学校では「味噌汁給食」を開始。運動会も戦時色一色でした



疎開先から帰校(昭和20年10月・精道国民学校) 焼け落ちた校舎を前に、立ちすくむ児童たち

◆宮川小学校(昭和2年開校) 昭和2年、現・県立芦屋高等学校の場所に武庫郡精道第二尋常小学校として開校。昭和7年に「武庫郡精道第二尋常高等小学校」8年「武庫郡宮川尋常高等小学校」14年「武庫郡宮川尋常小学校」15年は市制施行実施により「芦屋市宮川尋常小学校」16年「芦屋市宮川国民学校」18年に戦後、昭和22年「ば」芦屋市宮川小学校に、めまぐるしく校名が改称されました。また所在も、宮川町(写真・昭和20年8月の空襲で消失)から南宮町へ、さらに現在の浜町へと変わっています。

◆「空襲」による被害 昭和19年11月の東京空襲を皮切りに、本土空襲が頻繁となり、昭和20年5月11日、私たちの芦屋でも第1回空襲を受けました。また6月5日と15日、さらには8月5日から6日にかけてと、相次いで攻撃を受けています。なかでも、8月5日夜半から6日未明にかけての空襲では、1,500発もの焼夷弾が落とされ、市内の被害はもっとも大きなものでした。罹災者は総人口の5割、家屋は総戸数の約4割、学校は校舎の8割を失いました。 ~「芦屋今むかし」より~



市制施行 全国屈指の富豪村として発展してきた精道村の大字名

◆これが、現在の臨海線に沿った、すぐそばの浜辺の出来事だよ、おじいさんたちごんた坊主の、夏の朝の楽しい日課だったよ。

◆高瀬湊さん遊べ、あそべ！(一九九九年理論社)は、芦屋市立図書館に所蔵されています。 ※今回の掲載文については、字数の関係上、一部を省略させていただきます。この本の著者・高瀬湊さんは、芦屋生まれ、現在も芦屋にお住まいになっています。



昭和6年・阪神少年野球大会で優勝した精道小野球チーム「芦屋今むかし」より

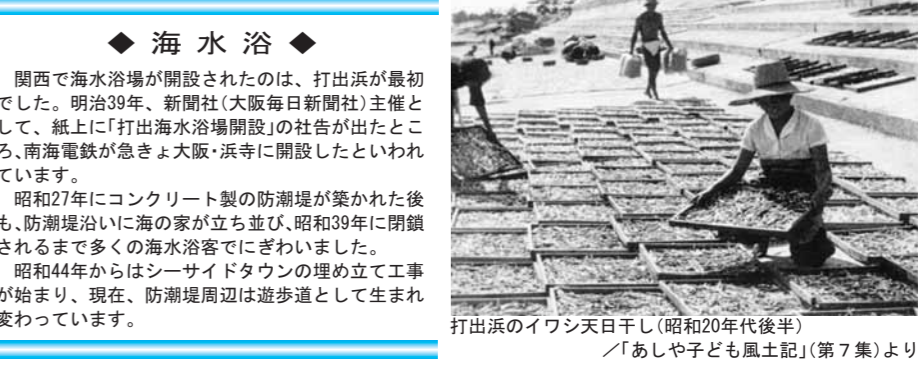
◆海水浴◆ 関西で海水浴場が開発されたのは、打出浜が最初でした。明治39年、新聞社(大阪毎日新聞社)主催として、紙上に「打出海水浴場開設」の社説が出たところ、南海電鉄が急きょ大塚・浜寺に開設したといわれています。昭和27年にコンクリート製の防潮堤が築かれた後も、防潮堤沿いに海の家が立ち並び、昭和39年に閉鎖されるまで多くの海水浴客でにぎわいました。昭和44年からはシーサイドタウンの埋め立て工事が始まり、現在、防潮堤周辺は遊歩道として生まれ変わっています。



打出浜のイワン天日干し(昭和20年代後半) 「あしや子ども風土記」(第7集)より



芦屋海岸漁獲の景(阪神沿線芦屋名所絵巻)「芦屋今むかし」より



打出浜のイワン天日干し(昭和20年代後半) 「あしや子ども風土記」(第7集)より

CATV 広報番組ガイド

オープニング	仲ノ池緑地	8:30
トピックス	芦屋美術博物館 七夕の催し 「学校園花いっぱい活動」写真展	12:00 16:00 18:15
特集	本が大好き 読みたいな おはなしノート	22:45
お知らせ	阪急芦屋川駅南月若自転車駐車場オープン 低公害車導入補助制度の申請受け付け	※DVD VTR 貸出可
エンディング	写真で振り返る「芦屋市の70年」	

■アナログ放送は9chで、地上デジタル放送は11chでご覧ください。
■番組に関する問い合わせ 広報課 ☎38-2006 ■CATV全般に関する問い合わせ 株式会社ケーブルネット神戸芦屋(J:COM)カスタマーズセンター☎0120-13-8160

谷崎潤一郎と富田碎花

二大文豪ゆかりの地 宮川町の富田碎花旧居は、奇しくも谷崎潤一郎も住んだゆかりの地として、往時の面影を伝えていきます。

谷崎潤一郎は、松子夫人と昭和九年この家に移り、現代語訳源氏物語、「猫と住造と二人のをんな」などの名作を執筆しました。昭和十一年秋、神戸住吉に転居し十六年秋から芦屋を舞台にした「細雪」を書き始めました。

「兵庫県文化の父」といわれた富田碎花は、大正時代初期から芦屋に住み、民衆派の代表的詩人として活躍しました。昭和十三年マツ夫人と結婚、谷崎の後へ居住し、五十九年十月に九十三歳で亡くなるまでここに住み続け、大きな文化的業績を残しました。

富田碎花(詩人・歌人) (1890年~1984年) *「芦屋今むかし」より一部抜粋

外国人居留地の子どもたち

あのころ、打出浜に三宜荘という、外国人たちが住んでいる一画があったんだ。ちよび浜町、埋め立て以前の海岸べり現在の臨海線のすぐ北側に沿ったところ。で当時そのすぐ裏手には、おじいさんたちの格好な遊び場だった松並木の原っぱや、白い砂浜が広がっていたよ。

外国人、それも白人家族の居住だけに、広々としたコンクリートの通路を十文字にめぐらせ、手入の行き届いた芝生に囲まれて建てられたハンガロ風の白い洋館、それに色とりどりの季節の花が年中植わった小ざいという取り取り取り世界は異国情緒がふりやう、打出の境界では別世界のよう存在だったよ。

ここに住む外国人たちが、果たしてこの国の人たちが、おじいさんたちは知らなかったが、全部で四十五戸くらいに数えられたかな、「遊べ、あそべ！」より抜粋

◆三宜荘◆ 打出浜(浜町)には、昭和6年、滞米生活を経験して帰国した施主の自邸と洋風貸別荘を兼ねた「三宜荘」が作られた。「三宜荘」は、約千坪の敷地に11棟の洋風小住宅が並んだもので、地元の大工棟梁による造作は素朴な味わいをもっていた。

*「阪神間モダニズム」中の小野高裕氏のコラム「二つの“文化村”」より

◆三宜荘 北西の角にあった中川邸(昭和02年/撮影・小野高裕)

「阪神間モダニズム」〜六甲山麓に花開いた文化、明治末期〜昭和15年の軌跡(平成9年発行・淡交社刊)より